

令和8年度第1回仙台市いじめ防止等対策検証会議

日時：令和8年6月30日（火）17:30～19:10

場所：仙台市役所上杉分庁舎2階 第1会議室

出席：氏家靖浩委員(会長)、本図愛実委員（副会長）、石川由紀委員、大曾根学委員
（欠席：村松敦子委員）

議事要旨

1 開会

2 局長挨拶

3 会議の公開・非公開の決定、署名委員の氏名

本日の議事について、附属機関等の設置及び運営の基準に関する要綱に従い、委員、事務局了承のうえ、公開とすることとした。議事録の署名は氏家会長と石川委員で行うこととした。

4 議事

○氏家会長

それでは、議事に入ります。まず、仙台市及び仙台市教育委員会による令和7年度のいじめ防止等対策事業について、事務局から説明をお願いいたします。

○事務局（いじめ対策推進課長）

資料1-1、資料1-2に沿って説明

○氏家会長

資料1について事務局から説明いただきました。当会議は、仙台市いじめの防止等に関する条例に基づいて設置されており、市や教育委員会が行ういじめ防止等の対策について検証・検討を行い、毎年、市長に報告を行うものです。今年度も、忌憚のないご意見を頂戴できればと思います。

昨年度の検証会議を振り返りますと、子どもたちからのSOSの受信に関することや、児童館と学校との連携をテーマとして検証を行いました。その中で、リアルな児童館の様子もある必要があるということで、児童館運営団体の方にヒアリングを行いました。児童館のスタッフの方々も日々苦勞されているけれども、いじめに対する意識の高さが感じられました。

ここからは、今年度の検証について、委員の皆様にご意見を伺ってまいりたいと思います。まず、学校現場の立場から石川委員、いかがでしょうか。

○石川委員

現場の教員として思うのは、様々な施策があり、予防的なものもあるのですが、学校で子どもたちに何か起きた時に、その子たちにどう対応するかとか、研修などで教員の力量を深めるということがあると思いますが、なぜいじめが減らないのかということです。いじめの定義が広く認知されて、それはいじめだからやめてくださいと言っていいということが浸透し、いじめの訴えが多くなるのは理解できるので、そこは良い点だと思いますが、そもそも、いじめはどうして減らないのか、減らすためにはどうしたらいいのかというところを考えていきたいです。昨年度の第1回会議で、本図副会長から、施策としてやっていることに對して一つ一つ効果があったのか検証をしなくていいですかという話があり、それが一つ必要かなと思います。もう1つは、様々な文献などを読むと、例えば弁護士からは、いじめをもっと人権問題として取り上げた方が良いという意見もありますし、学級担任や学校の先生

の立場だと、学級や学校の集団づくりでリテラシーをあげていくという意見もあります。何がいじめに対して必要なのか。要は公衆衛生的に、今だと対症的にやっていたり、一部予防的にやっていたりするところがあるのですが、もう少し広い意味で全体のレベルを上げるためにどうしたらいいのか考えていきたいと思っています。

○氏家会長

予防的な施策というのは、何か起きてからではなく、あらゆるものにSOSが潜んでいる前提で関わりたいということであり、教育相談の大元は、そういった方向に舵を切ったのは確かだと思う。生徒指導提要に基づいて考えるとすれば、問題のあるなしに関わらず、大人の側は予防の志を持って関わりたいと言われている部分ではあります。弁護士が関わるといえるようなお仕事では、人権問題というのも含めて、その色彩が強くなっているのではないかと思います。

次に、本図副会長、いかがでしょうか。

○本図副会長

事務局に前年度の事業一覧を作っていて、前年度の当会議からの提案に大体対応する形でトピックとなる項目の説明もあり、今後の動きがよく分かりましたが、1点だけ確認したいのが、前年度の報告書の中で、学校と児童館との連携についての提案がありました。それに対しては、今後どういう動きになっていくのか教えていただければと思います。

学校現場では、いじめ対応の共有もしていて、いじめ認知件数が増えることはいいことだ、それは丁寧に対応しているということだというのは間違いありません。重大事態については、センシティブな情報なので、こういった会議で持ち出すこともできないと思いますが、結果として学校が対応に苦慮しているのではないかと推測され、それはどうしたらいいのだろうという思いがあります。結局、学級、学年、学校経営なのではないか、先生方が余裕を持って指導していくということに尽きるのではないかという気がしています。資料1-1にまとめていただいた仙台市の取組の中では、研修が若干関わりますけど、いじめについて非常に多くの研修を行っています、先生方がオンラインも含めて学んでいるというだけで本当にいいのかなという気はしています。

○氏家会長

当会議では、研修について年1回は必ず触れている部分だと思います。研修メニューとして揃ってきた部分もあるのかもしれませんが、研修で学んだことが行動に移せるかということとはまた別だと思います。やはり学級経営であり、個々の先生方がゆとりをもって指導できているか、あるいはチームとして取り組んでいるかという部分は、研修とはまた違うステップにあるのかなと思っています。

今、本図副会長からお話がありましたが、3月の市長報告から3か月が経過し、昨年度の提案への対応について何か動きがあれば、事務局からご説明いただけますか。

○事務局（いじめ対策推進課長）

児童館と学校との連携について教えていただきたいとお話がありましたが、こども若者局の担当部署から全ての小学校に対して、小学校と児童館における情報共有の推進等に係る通知を出しているほか、毎年、教育局・こども若者局・児童館の職員が合同で、いじめに関する研修を行っています。今年度の研修はこれからになりますので、現在内容を検討しているところです。

○氏家会長

当会議としても、こういったやり取りを今後も様々な形で行っていくことで、お互いが刺激を与えつつ、それでまた私たちの行動もお互いに変わるというぐらいいいかなと思います。

ます。児童館も学校も、共通するこどもたちに関わる場所ですから、情報共有や研修会などを今後も行っていいただき、いじめに限らず、何かあったときの気付きや、こどもたちと関わる手立てについて、いろいろ取り組んでいただけたらと思います。

次に、大曽根委員、いかがでしょうか。

○大曽根委員

昨年度の会議での議論を踏まえ、自分なりに考えていたのは、いじめが起こることは避けられないだろうなということです。人間関係がある以上、大人の世界でもハラスメントが起こっている状況を見ると、どうしても嫌だと思えることは発生します。昨年度も申し上げた通り、その時にきちんと声を上げられるかどうかが大切だと思います。加害者の方も自分はいじめているつもりがなくても、これは良くないことだとか、周りが傍観するだけでなく、それは良くないことだと気付かせることはすごく大事な観点だと思います。被害者に関しては、声を上げることのハードルを下げる必要があります。そして、いじめを発見した方も報告したり、加害者の方に伝えたりできるというように、周りの人でも助けられる環境を作り、それが恥ずかしくないことであるとか、良いことであるということ、そういった調整が一番大事です。それが早期発見につながり、再発を防止するということになってくると思います。実際にどういう取り組みがあるのか、また取り組んでいるとしたらどういう効果が見られるのかなど、そういった検証ができるといいのではないかと思います。

○氏家会長

大曽根委員がおっしゃったように、悪意を持っていじめを行っている子だとしても、少なくとも教育という場では、その子に対して、いい方向につなげるような指導をしなければならぬはずです。いじめを行う側は、自分自身の鬱憤晴らしをしていたり、相手が嫌がっていることを分かっているが、軽いからかいの気持ちでしてみたようなことを言ったりしてしまう場合があります。同時に、傍観者として、この構造には関わらないで見ていくぐらいだったらいいかなと思っている人たちもいます。そのあたりの構造をきちんと把握した上で、一番理想なのが、教職員が気付いた段階で関われるということなのではないかと思います。嫌な思いをした子もすぐにSOSは出さずに、大丈夫です、何でもないとすることもあります。いじめを行っている側の子も悪意はなく、ちょっとからかっただけです、みたいな言い方をする部分があると思います。中には悪意を持ってやっている子もいると思うので、そういう子に対して、どのような防止策が合っているのかということも、手を打たなければならないという気がします。この数年のうちに施策が充実してきていることは確かではありますが、ここまでやったからいいというものではなく、いじめであるかないかを抜きにして、嫌な思いをしている子がいるのであれば、助ける方法を考えていかなければいけないし、いじめを行っている子を何とかして止める手立ても考えていかなければいけないと思います。

今年度検討に値するようなテーマとして、私の方からも意見を申し上げたいと思います。S-KETは開設して何年目になりますか。

○事務局（いじめ対策推進課長）

S-KETは令和2年6月に開設しましたので、約6年経過したところです。

○氏家会長

開設から6年経つということでS-KETの活動が気になっていたところです。S-KETを知っているという方もいれば、知らないという方もいますが、だんだん認知度が高くなってきているのではないかと思います。個人的に、S-KETは画期的な場ではないかと思っています。本市のいじめ防止において果たしている役割について、何らかの形で検証できないかという思いがあります。この会議上でオフィシャルには扱ったことがないので、今年度のテーマとして、私はS-KETを挙げさせていただきたいです。

○本図副会長

S-KET の機能を検証することは意義があると思いますが、その時に、多元的な相談機能が充実しているか、学校自体の相談機能がきちんと役割を果たしているのかという視点も大事ではないかと思います。S-KET だけを取り上げるというよりは、学校の中で相談しやすいかどうかということがとても重要です。学校に言いにくかったら他で言えばいいということではなく、一番は学校に相談することだという気はしています。

○氏家会長

私も S-KET が機能していればそれでいいということではなく、学校の相談機能が充実していた方がいいと思います。S-KET の存在によって、いじめそのものの解決や、いじめ防止に有効であった事例はありますか。

○事務局（いじめ対策推進課長）

S-KET に保護者や児童生徒から相談があった場合は、相談者の了承を得て、相談内容を学校に伝え、S-KET の専門員と学校で調整を行うという流れになっています。いじめを未然に予防するというよりは、すでに起こっていることに対して、解決に向けた支援をしているという位置づけだと捉えております。

○氏家会長

事前解決型というよりは、調整という役割が大きいということになりますよね。S-KET には学校の先生の経験者も在籍しているのですか。

○事務局（いじめ対策推進課長）

室長として、元校長が1名在籍しています。学校との調整などで、校長時代の経験を生かして業務を行っております。

○氏家会長

アーチルなどに行政教員として配置される方は、そこでの気付きが学校現場に戻ったときに生かされているのではないかと思います。学校現場だけで勤務していた場合よりも、アーチルの仕組みや、対象となる子たちとの関わりなどもできると思います。こども若者相談支援センターなども同様かと思います。場合によっては学校教育への還元といったところも考えていけたらと思います。

○石川委員

私が気になっているのは、なぜ同じようないじめが起こるのかということです。こどもの発達段階によっては、1回指導したからといって改善されるものではないというのは分かります。やっちはいけないと分かっているけれどやってしまうみたいなことがあります。もう少しこどもたちが思慮深くなっていれば、そういうことは起こらなかったということは現場ではたくさんあると思います。無意識のいじめや、ちょっとしたからかい、そういうことをすること自体が恥ずかしいという雰囲気を作っていけないかなと考えています。勇気を持って、声を上げて被害を訴えろとか、声を上げやすい環境を作るというのも、大事だと思います。周りが気付いて、それはおかしいとその場で言える雰囲気や人間関係を作っていくことで、そもそもいじめをすること自体がおかしいよねっていう、そういうこどもたちを育てたいと思っている。そのためには、学級づくりや学校全体のコミュニティづくりがうまくいっているところに行き、具体的にどういうことをやっているのかを聞いてみたいです。おそらく教室を見れば、ちょっとした約束をどうするかみたいなものがあると思う。うまくいっているところは学んでいってどこかに還元できるものがあればいいと思います。学校づくりはやはり大事なものであり、それをうまくやっていくためにはどうしたらいいのかなと思

います。せっかくこれだけの施策があつてお金をかけているので、この施策の中でこういうところが絡んでいるから、ここをもう少し手厚くするとうまくいくといったように活用できないのかなと考えています。もしそういうものがこの中にはないのであれば、今後どういったものが必要かを考えていくこともいいと思います。

○氏家会長

いじめをすること自体恥ずかしいことであり、いじめはあなた方が気付かないうちにやっている場合もあるということを、単刀直入に伝えるような授業があつてもいいのかなと私は思います。様々な意味で、命を大切にする教育のように、いじめ防止のエッセンスを組み込んだ授業はあるかもしれない。そういったものはまだ不足していますし、あるいはちょっとアプローチの仕方を変えてもいいのかなと思っています。

○本図副会長

こどもたちの力を育てているという点で、個別の例を出して恐縮ですけど、去年、私と村松委員が訪問したある小学校において、児童館も含めて、縦割り活動と総合的な学習の時間をうまく組み合わせていました。6年生が、1年生の何々さんをこういう子に育てたいという手紙を書いてその1年生の保護者に渡し、その子を成長させるプロジェクトを組んでいて、これをやるようになってから、いじめが減ったという話を伺いました。この事例を現職の大学院生の先生たちに話したら、本当に驚いていました。そういうことをしたらこどもたちが育って、いじめなんてやっている場合じゃないとなるのは当然だという話を学生たちがしていました。私たちも学校に行ってみて初めてこういう素敵な試みを知ることができました。事務局の皆様は、こどもたちのリーダーシップや自尊心を育てるいい試みをしている事例もいろいろご存知でしょうから、それらをもっと共有して、じゃあやってみようというような広がり、この検証という活動を通して絡むことができるといいと思いました。

○氏家会長

今、本図副会長から出た学校の事例について、もし事務局の中で勤務経験のある先生がいらっしゃいましたら、可能な範囲でお話いただけますでしょうか。

○事務局（児童生徒安心課主幹）

私が勤務していたのは、平成27～29年度頃ですが、どのようにこどもたちを育てていくかということを、地域とも連携しながら、学校全体で考えていたと聞いています。通常の縦割り活動だと数人のこどもたちがグループを作って、こどもたちをまとめていますが、そういう形ではなく、一人の6年生に一人の1年生を1年間任せるという形で、集団対集団ではなくて、1対1から育っていくものだというところに立ち返って始めました。1年生が育つのと合わせて6年生のこどもたちも育っていきました。この活動を通して、こどもたちが育っていくことを改めて教員も感じたところがありました。例えば、掃除のときは、雑巾がけの仕方を6年生と一緒に動きながら教えていました。1年生が育つのを6年生は実感として得られるので、自己有用感が得られていたと思います。6年生が卒業する頃には1年生が育っていて、自信を持って中学校に向かわせるということに取り組んでいました。それが地域の中にも広がって、同じ中学校区に広がっていきました。

○大曽根委員

本当におっしゃる通りです。いろいろな学校で独自の取組みをされていて、もちろんそれは地域性があつて、この学校だからできるというものもあります。それが本当に全小中学校にきちんと適用できるかというのはありますが、そういった情報が集まって、それを取捨選択できる状況がいつでもあるというのはすごくいいことだと思います。私の立場からすると、家庭教育の観点でどういじめと向き合っていくかということになりますが、そのこど

もが育つ家庭環境によって、親や大人の背中を見ていじめを行ってしまうとか、もしくは親子の関係が希薄すぎることや、過干渉すぎて同級生への扱いややりとりがいじめにつながるというのは実感してあります。そういった研究も結構あるのが事実です。資料1-1にある34事業を見ていくと、家庭にどういう意識付けをするかという取組みはあまりないように感じられます。一番近いのは31番「学校・保護者・地域の意見交換」かと思いますが、これはあくまでコミュニティ・スクールのことを指しているのもであって、PTA総会でもこんな議題はないような気がします。学校でいろいろな取組みをされていることや、先生がどれくらい苦労しているかとか、そういったところを知ると、学校はここまでやってくれていると思って、家庭もきちんとかどもと向き合おうという気持ちになります。自分ごととして取組むことがすごく大事になってくると思います。実際に学校側、もしくは教育委員会も含めて、家庭にそういった啓発や情報提供などをできるのか、それを本当に検証できるのか、聞いてみたいと思います。

○氏家会長

保護者の中には学校に呼ばれることすら嫌だとか、苦労しているのはあなたたちだけではないという方もいらっしゃるような気がします。そこが難しいと思います。理念はすごくよく分かります。しかし、やり方を間違えてしまうと大変なことになるような気がしています。事務局にお伺いしたいのですが、大曽根委員からお話のあった資料1-2の31番「学校・保護者・地域の意見交換」での実践について、具体の事例をご説明いただけますか。

○事務局（児童生徒安心課長）

今、どの学校でも学校運営協議会を行っていて、いじめをテーマにして扱っている学校がほとんどではないかと思います。生徒会や児童会のこどもたちを参加させている学校が一定数あることも伺っています。また、PTA総会や中学校の新入生の保護者説明会の場で、いじめの定義やいじめの対応について、保護者の皆様にご理解いただく場を設けていることが多いのではないかと思います。

○氏家会長

ありがとうございます。年1回、入学前後の時にやっているということですね。

○事務局（児童生徒安心課長）

学校運営協議会は年に数回、不定期で開かれています。PTA総会や中学校の新入生の保護者説明会は、年1回ということが多かったです。

○大曽根委員

春のPTA総会の時に、教頭先生が中心となっていじめの定義から始まって、本校の取組みはこんな感じでやっていくということをお話いただいています。期待したいと思うのは、例えばシンポジウムとまでは言いませんが、こどもたちがいじめについてどう考えて、防止するためにはどうしたらいいのかみたいなことを議論し、それを発表する場に、保護者が観覧者として参加する取組みがあってもいいのかなと思います。家庭教育としてできるいじめ防止としては、SNSの使い方に関する教育であるとか、スマートフォンやパソコンの利用に制限をかけるとか、そういったところはできると思います。それを行うにはどのような方法が有効なのか。保護者としても、SNSによるいじめを防止する方法や保護者が関われるやり方について、何か取り組みがあればと思います。SNSに関連して伺いますが、資料1-2の12番「SNSを活用したいじめ相談の実施」について、アクセス数が年間165件というのは、そんなに多いようにも読めない気がしました。

○氏家会長

このアクセス数というのは全て児童生徒によるものと考えていいですか。

○事務局（児童生徒安心課長）

その通りです。

○氏家会長

相談窓口が SNS など IT 関係にどんどん移行していく時代になってきていると思いますし、それをうまく活用できないと、いじめの予防も SOS の受信もできない時代がいずれ来ると思います。DX 社会そのものは、当分過渡期が続くと思うので、まだまだこれからだと思います。それよりも、先ほどの大曽根委員のお話にあったように、学校と保護者が車座になって、いじめはだめですよみたいことが、リラックスした形で伝わる場があればいいなと思います。それから、石川委員がおっしゃっていましたが、何度も同じことを繰り返して言うよりも、やはり一回で考え方が伝わるような場が欲しいですね。

○石川委員

1 回でなくて、じわじわ伝わるのもいいんですけども、相手が嫌がるようなことをしてはいけないとか、人と人が関わる時のルールがあるみたいなことが伝わってほしいと思います。もちろん学校でも教えますし、人との関わり方は家の中で教わってきくこともあると思いますが、世の中全体で人と関わる時に、自分がいいと思っても相手はそう思わないこともあるみたいなものが当たり前に共有できるようにするにはどうしたらいいのかというところがすごく難しい。小学校も中学校も 1 回の指導で伝わるというのは難しいのですが、土壌作りみたいなものが何かできるのではないかと思います。傍観者に対してどういう指導をするか、その傍観者たちの意識を上げることによって、全体のクオリティが上がっていくと思います。ダメなものに対してそれはダメと言えるような雰囲気づくりやコミュニティづくりが、これから必要なのではないのかと思います。

○氏家会長

いじめの構造の中では傍観者とか第三者と言われていますが、いじめが起きているけれども、自分にさえ火の粉が及ばなければいいということで、見て見ぬふりをするような、観客になっている方々が、そういうことはダメだよと言えれば、相当子どもたちも救われると思います。社会学者の森田洋司さんが、その子どもたちが勇気を持ってやめようと言わせられるかどうか、ということをやっと言い続けていましたが、そこが一番難しいところであると思います。いじめを行っている子に対して、単刀直入にそれはやめなさいと言う以上に難しいです。もしかしたら自分がターゲットになるかもしれないとか、自分自身だって果たしてそんな偉そうなことを言う立場なのかみたいな思いから、言葉を発する側に持っていくのはなかなか大変です。一つの学校を限定するわけではないですが、育ち合いみたいなものを行うことによって、発達と人間関係をうまく絡み合わせている学校の実践については、テーマの 1 つに挙げてもいいのかなという気がしています。

○本図副会長

子どもにとって、学校は生活の全てです。いじめ未然防止を実践する学校文化を作っている学校を見たいです。先ほど例に挙げた活動について、同じようなことを全ての学校でやってくださいということではないと思います。学校それぞれの事情や歴史の中で、子どもも学校文化を作る重要な一員となっています。次の学習指導要領では、ますます自己調整や自立、自ら舵取りをするとか、そういった力が重視されるようになっていくわけで、そういった子どもたちが自助と言うか、石川委員がおっしゃっていた、いじめっておかしいよねっという学校文化を作るために、大人たちがどういう環境構成をしているか、それを効果的に

行っている学校をいくつか取り上げていくことによって、皆さんが報告書を見てくれることにもなると思います。こどもにとっては学校がまず大きな空間です。それを補完し、多面的な機能としてのS-KETは大事だと思いますが、本丸は学校であって、先生たちがリーダーシップも含めて、学校文化をどうやって作ろうとしているのかということに引き続き焦点を当てていくべきだと思う。

○氏家会長

学校がこどもにとっての居場所となっていることから、もし家庭や地域社会などとの連携もうまくやっているような学校を挙げただけなのであれば、学校文化をキーワードとして、いじめ防止、あるいは人間関係の豊かな育みを行っている実践をお聞きしたいと思っています。いじめのことに限らず、都市部の人口流動の多い学校と、比較的昔ながらの地域、昔ながらの学校を一緒にして仙台の学校とは言えないところが、仙台市の良さでもあり、なかなか難しいところだという気がします。学校文化としていじめを許容しない人間関係を作っている学校では、校内の流れもあれば、校外の方も巻き込みながらというアプローチもあると思います。それを支えるものの1つとしてS-KETというシンボリックなものもあると思うところで、テーマとして見込めるのかなと思います。

○本図副会長

氏家会長のS-KETを取り上げたいという意見には賛成しますが、そこだけが柱になると、学校がこどもたちのSOSをキャッチしていないというふうに見られてしまうのはとても嫌だなと思います。学校は頑張っているわけで、S-KETはセーフティネット的なものであるという位置づけで取り上げるのはいいと思います。

○氏家会長

それは同感です。優先順位としてS-KETが最初に来ることはないと思います。S-KETは開設から年数が経っていなかったため、これまで当会議で取り上げてこなかったことから、今回総括をしてみたいという思いがあります。S-KETには、学校のバックアップとしての存在意義があると思っています。

○大曽根委員

資料1-2の11番「24時間いじめ相談専用電話の設置」、12番「SNSを活用したいじめ相談の実施」、13番「いじめ等相談支援室S-KETの運営」というのは、あくまでセーフティネットとしての対応であって、これらの相談件数の多寡によって、有効かどうかみたいな検証は的外れだと思いました。その上で、相談件数が過去と比べて増えている、減っているといった動向は見ていく必要があるかと思います。件数の動向は注意深く見ていきますが、件数の多寡に関しての発言は慎重にしたいと思います。もう一つ、いわゆる家庭教育でいじめ防止もそうだが、傍観者にならなかったという事実に関して、例えば我が子が勇気を出して行動したということに関して、保護者は積極的に、勇気のいることをしたね、いじめられている子が救われた、いじめる子に気付かせてあげたなどと、家庭の中で褒めるであるとか、称賛する活動は有効なので、それを促す活動が必要だと思います。言われなくても分かっている家庭はあるかと思いますが、自己肯定感や有用感を高めるためにも、家庭からもそういった行動に対して、称賛できる仕組みを醸成するのは大事だと思います。これはPTA協議会としても、改めて総合的にやっていきたいと思いました。

○氏家会長

大曽根委員のおっしゃる相談件数の多寡について、相談窓口を設置していて人件費や広告費等がかかっている場合、目的や意図があってやっている限りにおいて、本当に有効なのかどうかについて検討を避けて通れない部分があると思っています。例えば、こういう相談機

関に頼まなくても、校内でスクールカウンセラーなどに相談できて、勤務時間を延ばすなり、工夫すればやれるということであれば、相談機関の予算措置はしなくてもいいということになるかもしれません。相談窓口があっても本当にそれは有効ですかという目線で関わる人は必ずいます。そういった点に着目していただいたところはとてもいいと思いました。先ほどの学校文化の話題から見たら相対的に優先度は低くなるかもしれませんが、テーマを検討するうちの一つには入れておきたいと思います。

○大曾根委員

最近では、こどもが最初に相談する相手がAI という場合もあります。我々の価値観や相談する方法などが日進月歩になっている実情というのは、把握する必要があるのではないかと思います。

○氏家会長

学校文化の側面というのは、我々にとって当たり前のように思ってきた部分なので、一度再考する必要があるのではないかと思います。学校文化という視点からの検証は、昨年の報告書の内容を受ける形もあり得るかと思えますし、それを踏まえた上で、相談のバックアップ機能や、家庭へのアプローチのようなものに関して、S-KET だけを取り扱うという気はありませんが、少なくとも、学校以外のところで保護者が相談できたり、こどもたちも嫌な思いをした時に SOS を出せたりする S-KET という場所があるということは、学校文化と対比としてもいいのかなと思いますので、そこは一つ検討したいと思います。

○石川委員

昨年度、本図副会長が訪問した学校のお話は私も伺ってみたいと思いました。もう一つ考えているのは、学校というのは勉強だけではなく、いろいろなことを学ぶ場でもあります。勉強が分かるということは大事だと思う。勉強が分かるとか、授業が楽しいとか、そういうことも学校に行って楽しいということにつながるのかなと思っています。学校文化というものを考えたときに、学校がそれぞれのこどもに合った勉強の仕方や、こどもたちそれぞれが自分にいいところがある、自分は勉強が分かって勉強が楽しいから学校に通える、そういうところも中にはあってもいいのかなと思っています。

○氏家会長

本日はたくさんのご意見をいただき、ありがとうございました。今年度の検証テーマについては、委員の皆様からいくつか挙げていただいたものを会長の方で一旦お預かりさせていただいて、事務局とも相談した上で、2 回目の会議に諮らせていただきたいと思います。

5 その他

なし

6 閉会